

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 博士学位申請論文概要

論 文 題 目

短期留学生のソーシャル・ネットワーク  
形成と日本語教育  
—寮という実践コミュニティの参加分析—

申 請 者

山川 史

2014年2月

## 第一章. 序論

本研究の目的は、短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の実態を明らかにし、寮という実践コミュニティへの参加過程における経験と学びを分析することにより、短期留学生に対する日本語教育および短期留学プログラムのあり方について再考することである。

近年、日本の大学において短期留学生が増加している（独立行政法人日本学生支援機構, 2012）。この背景には、大学における奨学金制度が整備・拡充されたことがあり、それは諸外国に対する政治・経済政策と密接に関わっている。短期留学は、今後、留学政策の重要な柱の一つとなっていくと考えられており、日本語教育の分野においても短期留学生に対し、いかに充実した留学生生活を提供できるかがより一層重要な課題となっている。

短期留学生に対する日本語教育は、従来、教室内で日本語教師がいかに効率よく日本語を教えるかという「狭義の日本語教育」（尾崎, 2001）を提供することを目的としてきた。そのため、教室外における短期留学生の具体的な生活にはあまり関心が向けられず、そこでの学びの意義についてはほとんど取り上げられてこなかった。

しかし、短期留学生は、留学中、様々な人と出会う中でソーシャル・ネットワークを形成し、文化的・社会的経験を通して多くのことを学んでいる。日本語教育と短期留学生という関係において、日本語教育が短期留学生の日本語の学びを支えるものであるならば、当然、教室内だけでなく教室外も含めて広い範囲の学びが日本語教育研究の対象となると考える。そのため、短期留学生が留学中、どのようにソーシャル・ネットワークを形成し、どのようにコミュニティに参加しているのか、また、そこでの経験と学びとは何なのか、という観点から日本語教育を捉え直すことが必要なのである。

したがって、本研究は、社会的・文化的文脈を重視する社会的アプローチの立場をとり、従来のような狭義の日本語教育に対し、広義の日本語教育を提示しようとするものである。本研究は、大きく2つの調査から構成されており、具体的な研究課題は、次の通りである。

- 1) 短期留学生はどのようにソーシャル・ネットワークを形成しているのか。
- 2) その中で、寮という実践コミュニティへの参加過程における経験と学びは

どのようなものか。

研究課題 1 では、一次調査として短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の実態を包括的に把握することを目的とする。二次調査である研究課題 2 は、研究課題 1 の結果を受けて設定したものである。研究課題 1 で、短期留学生がソーシャル・ネットワークを形成していく中で複数のコミュニティに所属しており、その中でも寮が重要なコミュニティであることが浮き彫りになった。そのため、二次調査として寮に焦点を当て、その参加過程における具体的な経験と学びについて分析する。その上で、短期留学生に対する日本語教育および短期留学プログラムについて再考する。

## 第二章. 短期留学プログラムと短期留学生

短期留学プログラムとは、「大学間交流協定に基づいて自国の大学に在籍しつつ、必ずしも学位取得を目的とせず、大学等における学習、異文化体験、語学の実地習得などを目的とし、1 学年以内の教育を受けて単位を習得または研究指導を受ける」プログラムをいう（独立行政法人日本学生支援機構, 2012）。短期留学プログラムは、海外の大学において、主に日本語習得あるいは文化理解を促進するための手段として位置づけられている（ヤコブセン, 2007）。一方、受け入れ側である日本の大学では、短期留学は長期留学と区別され、「学習者の一時預かり」として位置づけられており、短期留学生は「お客さんの存在」として扱われることが多い（丸山・近藤, 2005）。このことから、受け入れ側大学は、短期留学生を大学内に取り込もうとする点において、あまり関心を払ってこなかったと考える。

実際、短期留学生の多くが学習面および生活面において日常的に日本人学生と断絶され接触度が低いため、日本人学生となかなか友人関係になれないという問題が指摘されている（佐藤, 2011 など）。短期留学生が充実した留学生活を送るためには、日本の受け入れ側大学は、短期留学プログラムのあり方を再考し、短期留学生の置かれた環境を改善する必要がある。なぜなら、短期留学は、日本にいる時間は「短期」であるものの、その後の短期留学生の人生設計において影響を及ぼし、一人一人の人生においては「長期」的なものであるからである（小林, 2013）。短期留学生がいかに日本での留学を意義あるものとして捉

え、留学後もいかに日本とのつながりを維持したいと考えるのか。それは、短期留学プログラムの質にかかっている。そして、そこに日本語教育が果たす役割は大きい。

### 第三章. 学習観の変遷とソーシャル・ネットワーク研究

言語習得研究における学習観は、認知的アプローチから社会的アプローチへと移り変わってきている。短期留学生に対しても、これまで留学前後のテストによって個人の言語能力が数量的に測られ、その結果が重視されてきた。しかし、そのような方法では、短期留学生が言語習得の文脈から切り離され、結果に至るまでのプロセスが見落とされている。そのプロセスを汲み取るため、社会的アプローチに基づく研究方法へと移り変わってきている。短期留学生がいつ、どこで、誰と、どのように接触しているのか、その中で何をどのように学んでいるのかという、具体的な文脈を記述する必要があるのである。この短期留学生の置かれた文脈を調査する方法として、ソーシャル・ネットワーク研究がある。

ソーシャル・ネットワークとは、社会における人と人とのつながりである。留学生の多くは、来日後、ほとんど知り合いのいない状態から、徐々に周りの人たちと接触し交流しながら、なんらかのコミュニティに所属し、ソーシャル・ネットワークを形成していく。この留学先でのソーシャル・ネットワークは、言語習得や文化理解、アイデンティティや学習動機などに影響を与えることが明らかになっている (Isabelli-Garcia, 2006; Stewart, 2010; 松下, 1995 など)。

日本語教育研究においては、いわゆる「地域の学習者」を対象にしたソーシャル・ネットワーク研究は多く行われているものの、短期留学生を対象にした研究は少ない。その中の先行研究では、主に短期留学生と日本人との友人関係に焦点が当てられ、それ以外のソーシャル・ネットワークは対象とされてこなかった。また、ソーシャル・ネットワーク形成の問題が文化の差異や言語能力の問題、あるいは個人のストラテジーの問題として議論されてきた。そのため、ソーシャル・ネットワーク形成に影響を与えるであろう環境には目が向けられず、ソーシャル・ネットワークの全体像は議論の対象とされてこなかった。

したがって、本研究では、個人の内部に問題の所在を見出すという従来の考

え方とは異なり、短期留学生が置かれた環境に注目することで、ソーシャル・ネットワークを短期留学プログラムとの関連で議論していく。日本語教育において、短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成に注目することは、彼らの留学生活全体を把握し、彼らを全人的な学習者として包括的に捉えていく視座を与えてくれると考える。

#### 第四章．研究方法

本研究は、ある大学に所属する短期留学生を対象にしたケース・スタディである。ケース・スタディとは、「あるひとつのユニットや境界づけられたシステムの集約的な記述と分析」を行うことである (Smith, 1978)。

調査フィールドは、学生数約 2,000 人の東京の私立大学である。この大学の短期留学プログラムは、いわゆる交換留学プログラムであり、協定校から毎年 150 人程度の留学生を受け入れている。留学の期間は 9 月から 6 月までの約 10 ヶ月間であり、短期留学生には、基本的にキャンパスにある大学寮が提供される。この大学寮は、留学生と日本人学生と一緒に住む寮である。調査時期は 2009 年から 2011 年である。調査協力者は、学部所属する短期留学生 35 名（女性 20 名、男性 15 名）であり、年齢は 19 歳から 25 歳である。35 名中、29 名は大学寮に住んでおり、3 名はアパート、2 名は学生会館、1 名はホームステイをしている。この 35 名は、日本語の授業を 1 日 2 時間半、週 5 日履修しており、英語で行なわれる専門科目の授業も履修している。主なデータは、35 名に対する質問紙およびインタビューである。

本研究は、大きく 2 つの調査から構成されているため、それぞれの詳しい調査方法は、五章、六章の各章において説明する。

#### 第五章：短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の実態

ソーシャル・ネットワーク形成の全体像を把握するため、35 名の短期留学生に対し、質問紙およびインタビュー調査を行なった。質問紙の内容は、Dewey, Gardner & Ring (2011) を参考に、ソーシャル・ネットワークの「参加者」、「出会った方法」、「出会った時期」、「影響要因」、「プログラムへの期待」という質問事項から構成されている。質問紙は、E メールにより送信し、回収した。そ

の後、一人一人、60分から90分程度ソーシャル・ネットワークについてインタビューを行なった。分析方法は、それぞれの質問項目に関して比率を算出した。まず、「参加者」は、それぞれ挙げてもらった人数の平均を算出した。また、その内訳として「日本人」と「日本人以外」に分類し、それぞれ全体に対する比率を出した。さらに、その「日本人」と「日本人以外」の内訳の比率も算出した。「出会った時期」は、留学期間の10ヶ月を①留学前、②9月～11月、③12月～3月、④4月～6月の4つの時期（学期ごと）にあらかじめ区分した。そして、それらの時期に回答を分類し、比率を算出した。「出会った方法」、「影響要因」、「プログラムへの期待」に関する項目は、回答ごとにカテゴリーを生成し、それに対して比率を算出した。

また、短期留学生が具体的にどのようなコミュニティに所属し、その中で具体的にどのようにソーシャル・ネットワークを形成しているのか、さらに詳しく調査するため、35名中5名を対象にさらなるインタビューを行なった。そして、5名の所属するコミュニティ内におけるソーシャル・ネットワーク図をMilroy (1987) および Campbell (2011) を基に作成し、記述・分析を行なった。

分析の結果、短期留学生は、主に留学後3ヶ月以内に同世代の学生を中心に、授業や寮、クラブ活動などのコミュニティを通して、ソーシャル・ネットワークを形成していることが明らかになった。その「参加者」には、日本人が51%、日本人以外（留学生など）が48%含まれていた。ソーシャル・ネットワーク形成の影響要因には、「時間の共有」、「共通の趣味」、「対等な関係」、「性格性」などがあることが明らかになった。さらに、短期留学生は短期留学プログラムに対し、活動や居住場所などの「出会いの場」を提供してくれることを期待していることもわかった。また、5名に対する調査からは、複数のコミュニティの中でも、寮が最も重要な位置づけにあり、その中で大変密度の濃いソーシャル・ネットワークが形成されていることが浮き彫りになった。

先行研究では、主に日本人とのソーシャル・ネットワークを対象に研究が行なわれてきたため、ソーシャル・ネットワークの一部しか明らかにされてこなかった。本研究では、短期留学生と日本人とのソーシャル・ネットワークだけではなく、留学生同士などのソーシャル・ネットワークも含み、包括的な特徴を明らかにすることができた。また、先行研究では、短期留学生は日本人学生

と友人になることが難しいと言われてきたが、本研究の短期留学生は、比較的、日本人学生とソーシャル・ネットワークを形成しやすい環境にいたことがわかった。このことから、短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の問題が個人ではなく、短期留学プログラムが提供する環境と密接に関わっていると考える。短期留学生が学習面および生活面において、長期留学生や日本人学生と日常的に接触できる場だけではなく、そのソーシャル・ネットワークが維持できるよう一定の時間を共有することが必要なのである。その意味で、特に、寮は、短期留学生にとってソーシャル・ネットワーク形成の貴重な場であり、重要なコミュニティであった。では、実際、寮の中で何が起きているのか。それを明らかにするため、二次調査を行なった。

## 第六章. 寮という実践コミュニティにおける経験と学び

二次調査では、寮に焦点を当て、その中における短期留学生の経験と学びについて記述・分析を行なった。調査協力者は、短期留学生 35 名の中の 5 名（五章の 5 名と同一人物）とその友人である日本人学生 10 名である。その 5 名（ミシェル、アンジェラ、ウィリアム、グレース、マリア）に焦点を当てた理由は以下の通りである。①寮に住んでおり、3 回インタビューができた者、②その中でも日本人の友人を 2 名に対してインタビューが可能であった者、③さらにその中でも寮という実践コミュニティへの参加過程における経験や感情、行動や考えなどに対して豊富な情報を提供してくれた者である。日本人学生の調査協力者は、短期留学生に仲の良い友人を 2 名ずつ紹介してもらおうというスノーボール・サンプリング法を用いた。

データは、留学生活あるいは大学生活に関するインタビューである。短期留学生に対するインタビューは、全部で 3 回、キャンパス内で行なわれた。1 回目は、来日直後の 2010 年 9 月から 10 月までであり、2 回目は、2010 年 12 月から 2011 年 3 月である。3 回目は 2011 年 6 月である。インタビューの内容は、バックグラウンドや留学生生活全体および寮での生活について聞く質問などから構成されている。インタビューは 1 人の短期留学生に対し、1 回約 60 分から 120 分程度であり、英語または日本語で行なわれた。日本人学生へのインタビューは 1 回であり、バックグラウンドおよび留学生との関係、寮での経験などにつ

いてである。インタビューの時間は、1人約60分から90分程度であり、2011年7月から10月にかけてキャンパス内で行なわれた。

分析の枠組みとして、状況的学習理論を援用した。分析の対象とした語りは、短期留学生および日本人学生の寮での経験や学びに関する部分である。なお、この私立大学にある寮は、全部で12棟あり、全てキャンパス内に点在している。本研究の対象とする寮は、その中の学部学生用の短期留学生と日本人学生が一緒に住む5つの寮である。それらの寮は、寮生によって自主的に運営されており、寮生全員に義務づけられているミーティングや役割分担がある。また、寮の中のキッチンやリビングルーム、お風呂場などは全て共用となっている。

インタビューの分析の結果、寮という実践コミュニティにおける経験と学びは、それぞれ多様なものであった。ミシエルの語りは、寮生との関係性が「留学生-日本人」から「友人同士」さらには、「家族」のような関係へと変化していくことが中心であった。そして、ミシエルの学びには、共同生活に対する理解、日本語で表現するという自信の獲得、他者との関係性の変化、彼女自身のアイデンティティの変容があった。アンジェラの語りは、自分自身が「ソト」から「ウチ」のグループへ入ることができたという、彼女自身の参加形態の変化が中心であった。その中でアンジェラの学びとして、「ウチ・ソト」グループに対する理解、日本語使用と自己認識のギャップ、自分自身のポジションの変化、他者との関係性の変化が浮き彫りになった。ウィリアムの語りは、心から打ち解けることができる友人関係を構築し、彼らに受け入れられたことにより、寮が「自分の居場所」であると感じるようになったことが中心であった。その過程において、教室では学べない日本語、寮生活への理解、寮生としての自分の役割、寮生との絆がウィリアムの学びとして捉えられた。グレースの経験は、寮を「ミニ社会」であると感じ、そこでの参加を通して、自分自身が日本社会を理解できるようになっていったことが中心であった。その中でグレースの学びとして、多くの扉を開くための日本語という手段の獲得、異なる環境での生活の自立、他者との共同生活の意義に対する理解、「ミニ社会」に対する理解が浮き彫りになった。マリアの経験は、日本語ができずに誰かに頼っていた「子ども」から、自分のことは自分できる「大人」へと成長し、社会における主体的な参加者となっていったことが中心であった。その過程において、日本に対



する理解、共同生活の意味、自国に対する再評価、日本語による達成感がマリアの学びとして浮き彫りになった。

それらの学びは、どれも寮という実践コミュニティへの参加という状況の中に埋め込まれているものであった。本研究が対象とした寮には、短期留学生が10ヶ月間という限られた時間の中で、実践へのアクセスを得、そこでの参加形態を変化させ、活動の理解を深め、自らのアイデンティティを変容していくような活動システムがあった。この意味で、この寮は短期留学生にとって、日本語の知識の獲得といった狭義的な学びだけではなく、寮の一員として成長するという人間形成にも関わるような広義的な学びをも獲得する貴重な実践コミュニティであったのである。従来の研究では、寮は、教育の場として位置づけられながらも、その参加過程における具体的な経験や学びについては明らかにされてこなかった。本研究では、それらを明らかにし、日本人学生と一緒に住む大学寮が短期留学生にとって、実践コミュニティとして大きな意義があることを示した。

## 第七章. 総合考察

本章では、五章と六章の2つの調査結果と考察をふまえ、総合考察として、短期留学生にとってのソーシャル・ネットワークの意味と短期留学生の学びについて考察し、短期留学生に対する日本語教育および短期留学プログラムを捉え直す視点について論じた。

短期留学生にとって、ソーシャル・ネットワークとは、彼らの学びだけではなく、留学生活全体を支える重要なものである。先行研究では、ソーシャル・ネットワークの意味というものが十分に考えられてこなかった。本研究では、短期留学生にとって、ソーシャル・ネットワークを形成することは、「自分の居場所」を探すことと同義であると考えられる。その自分の居場所となるコミュニティを持っていることが、彼らの充実した留学生活へとつながっていくのである。また、短期留学生の学びとは、彼らが参加したいと思う実践コミュニティへの参加過程にあるべきである。ことばというものは、その中で、人と人をつなぐためにあり、そのために学ばれるのである。本研究の短期留学生たちは、寮という実践コミュニティにおいて多様な学びを経験し、そこに十全的に参加する

ことにより、一大学生としてのポジションと自信を獲得し、大学というより大きなコミュニティの参加へとつながっていった。その点において、本研究の短期留学生たちは、決して「お客さんの存在」ではなく、一人の大学生として留学生活を送っていたのである。

そのような短期留学生に対して、従来の日本語教育を捉え直すためには、まず、短期留学生の学びを日本語の知識の習得という学びから、人間形成に関わるような、より広い範囲の学びへと捉え直していく必要がある。また、日本語教師は、短期留学生の教室外の姿にも関心を示し、彼らを複数のコミュニティに属する主体として捉えるべきである。その上で、教室の機能を再考していく必要がある。その時、教室は、従来のような単なる「日本語を学ぶ場」から、日本語を学ぶことを通してお互いが「つながる場」となっていくはずである。そして、そこには、コミュニカティヴ・アプローチからソーシャル・ネットワーク・アプローチへのシフトが必要であると考えられる。

また、短期留学プログラムを捉え直すためには、短期留学生を長期留学生や日本人学生と必要以上に区別することなく、一人の大学生として扱うべきである。限られた時間の中で有意義な留学生活を送るためには、短期留学生がキャンパス・ライフにおいて「周辺の参加」から「十全的参加」できるよう、環境を改善すべきである。また、短期留学生の持続的な学びを支えるためには、受け入れ側大学の努力だけではなく、送り出し側大学の努力も必要である。日本語教育機関が国や地域を超えて必要な課題に応じて、ソーシャル・ネットワークを形成する。そのことにより、個々人や個々の組織では解決できないことを、そのソーシャル・ネットワークを生かすことで、問題を解決することができる。そして、それが日本と世界の国や地域を行き来する短期留学生の学びを支えるものとなるのである。

## 第八章. 結論

本研究は、短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の実態を明らかにし、寮という実践コミュニティへの参加過程における経験と学びを記述・分析した。結論として、これまでの考察を踏まえ、短期留学生に対する日本語教育および短期留学プログラムのあり方を述べる。

短期留学生に対する日本語教育は、従来のように教室内において、教師がいかにかに効率よく教えるのかという「狭義の日本語教育」を提供するのではなく、より広い範囲を射程とした「広義の日本語教育」を提供する必要がある。広義の日本語教育とは、短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の実態を把握し、一人一人の短期留学生を全人的に捉え、日本語教室の機能を再考した上で、日本語ということばを通して、人やコミュニティ、ひいては社会とつながり、関わっていくことを目的とする日本語教育のことである。短期留学生に対する日本語教育が目指すところは、教師が日本語の教室でいかにかに効率よく日本語を教えるのかではない。それは、日本語を通してお互いにつながり、影響し合いながら変容し、成長していくことなのである。

また、短期留学プログラムは、これまでの前提を問い直し、「短期」という名の「長期」的な視野の中で捉えられていくべきである。限られた時間の中で、短期留学生が充実した留学生活を送るためには、短期留学プログラムという箱の中に彼らを詰め込むことではない。逆に、そこから解放することなのである。短期留学生が他の学生と同じように、一大学生としてキャンパス・ライフに参加できることにより、有意義な学びへとつながっていくのである。そして、その学びは、短期留学生だけではなく、日本人学生の学びへともつながっていく。共に学ぶことで何が得られるか。そういった論点を持ち、短期留学生と日本人学生の交流が活性化され、お互いの学びが充実されるようなプログラム作りをしていくべきである。

本研究は、短期留学生の全体的なソーシャル・ネットワーク形成の実態を捉え、教室という枠を超えて寮という実践コミュニティにおける学びの意義を論じた点において意義がある。また、その中で短期留学生に対する日本語教育の捉え直しおよび短期留学プログラムの捉え直しについて論じた点においても意義があると考えられる。

しかし、以下3つの点において課題が残されている。まず、一つ目は、分析の視点についてである。本研究では、短期留学生が所属する複数のコミュニティの中の一つである寮に注目した。それは、寮が最も重要なコミュニティとして、短期留学生たちの留学生活の中に位置づけられていたからであった。しかし、寮以外のコミュニティにおける経験や学びについては、詳しい分析を行なっ

ていない。それらの分析を行なうことで、留学全体の学びが捉えられると考える。また、本研究では、研究結果をふまえた日本語教育実践への示唆にとどまっている。そのため、具体的な実践については記述していない。今回の論考を具体化すべく、その実践のあり方を模索していきたい。さらに、本研究では、短期留学生に限定して議論してきた。しかし、本研究における論考は、短期留学生だけではなく、留学生一般についても言及できる部分もあると考える。その点について、今後、検討していく必要がある。

以上の3点を今後の課題とし、短期留学生が日本でより充実した留学生活が送れるよう、今後も、彼らに対する日本語教育に携わり、そのあり方を考え続けていきたい。そして、短期留学で得たような個人レベルの交流が、最終的にはソフトパワーとして、日本と各国・地域の政治・経済的パートナーシップの基盤である相互理解と信頼関係の構築へとつながると信じている。

## 参考文献

- Campbell, R. (2011). The impact of study abroad on Japanese language learners' social networks. *New voices, The Japan Foundation, 5*, 25-63.
- Dewey, D., Gardner, D., & Ring, S. (2011). *Social network development during study abroad in Japan*. The Association of Teachers of Japanese annual conference paper. Hawaii.
- Isabelli-Garcia, C. (2006). Study abroad social networks, motivation and attitudes: Implications for second language acquisition In M. Dufon and E. Churchill (eds), *Language learners in study abroad contexts* (pp. 231-258). Clevedon, UK: Multilingual Matters Ltd.
- Milroy, L. (1987). *Observing and analyzing natural language*. New York: Basil Blackwell Inc.
- Smith, L. M. (1978). An evolving Logic of Participation Observation, Educational Ethnography and Other Case Studies In L. Shulman (Ed.), *Review of Research in Education* (pp. 316-177). Itasca: Peacock.
- Stewart, A. J. (2010). Using e-journal to assess students' language awareness and social identity during study abroad. *Foreign Language Annuals, 43*(1), 138-159.
- 内海由美子・吉野文 (1999) 「短期留学生の日本語実際使用場面の実態と分析：ネットワークの観点から」『千葉大学留学センター紀要』5, 30-55.
- 尾崎明人 (2001)「日本語教育はだれのものか」青木直子・尾崎明人・土岐哲 (編), 『日本語教育学を学ぶ人のために』 (pp. 3-17). 京都: 世界思想社.
- 小林明 (2013) 「留学プログラムが参加者に与えた影響に関する調査：社会人としての留学体験評価」ウェブマガジン『留学生交流』, 29. 8月号, 1-14.
- 佐藤由利子 (2011) 「日本への短期留学のニーズと課題に関する考察から：短期留学生調査回答の地域別、機関別、課程別分析から」『留学生教育』16, 13-24.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) (2012) 「平成 23 年度外国人留学生在籍状況調査結果」[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/data11.html](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html) (2012 年 8 月 22 日閲覧).
- 松下達彦 (1999) 「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育」『留学交流』11(12), 16-19.

丸山千歌・近藤安月子 (2005) 「短期留学プログラム日本語教育の課題：海外の日本語教育プログラムとの連携」『横浜国立大学留学生センター紀要』 12, 41-56.

ヤコブセン, M. W. (2007) 「米全国語学学習基準の3Cをめぐる課題：アメリカの大学における日本語教育の観点から」『日本語教育』 133, 51-56.